

総評

片山和俊 ■ 審査委員長、東京藝術大学名誉教授



表彰式の様子

世界が変わる。

常に変転しているのが世の中だが、2016年ほど世界情勢が大きく変わったことはないだろう。英国のEU離脱もまさかと思ったが、米国の「トランプ現象」は予想を超えていた。世界はこれからどこへ向かうのか予断を許さないし、日本にどういふ影響もたらされるかは、さらにわからない。

そういう外の劇的な変化に較べて、静かだが確実に進行しているのが内なる変化、人口の減少や少子高齢化だ。われわれがテーマにしている「地域の暮らし」と空き家の増加。グローバルな外的変化への対応はひとまず棚上げだが、内なる変化への対応は他人事では済まされない。

今回提出された提案を見渡して、空き家がすでに特別なことでなく、日常的に目にする身近な問題になっていると実感した。が同時に、事態に悲観しているだけでなく、挑戦やイノベーション(革新)によって乗り越えていこうとする前向きな姿勢に、頼もしさを感じた。空き家にチャンスがある。こういう時こそ前向きな気概が求められる。

今年は、地方大会での応募総数が大幅に増えたようだ。78校146作品(昨年度69校107作品)。そして今回の審査会の対象となった作品(42道府県より54作品)を見渡して、表現に差が少なく、全体にレベルが少し上がったように思われた。そして西高東低が多かったという過去の印象を覆して、今回はどちらかというと中央から東北方面に力作が多く見てとれた。

審査のベスト8以上の戦い(準々決勝)を振り返ると、今回はどちらかが勝ってもおかしくない白熱した戦いが続いた。銭湯を手掛かりに土間を用いた「長屋の湯」や「小さい町家」は、ともに完成度の高い建築的な提案であった。勝ち抜きそうな魅力を秘めていただけに残念である。また、伝統的家屋数軒を保育施設に利用する「建昔物語」も、施設が足りないという時機を得た提案だけに惜しかった。町の中で相互にどう機能させるのか、その説得力が足りなかった。また、敗れたものの、地域に残る旧家に着目し、無理のない改修により継承していこうという「甦る」に好感をもった。こういう試みはすでに各地に見られるが、地域の魅力や特色を見直す、最も素直な方法である。欠点を伝えることはやさしいが、伝統的な建物のよさを伝えるのは案外難しい。その中で試みとしては評価できるのではないだろうか。もう一工夫だ。

そして今回は残念ながら勝ち進めなかったのが、たたら、絹や織物、和紙、蓮根や炭鉱などによる提案であった。けれども地域の伝統産業は、地域の暮らしにとって重要な着眼点であり、今後期待したい。また、バス停を通過点から滞在交流の場に変えようという試みが複数見られた。思いつきは面白いが、提案者自体がそこにしばらく居たいと感じる魅力が与えられていなかった。それを発見してもらいたかった。

毎回言い続けてきたことだが、今回提案パネルの表現、文字量と大きさ、計画図や説明図の的確さなどが、かなり改善されてきたように思われる。審査する側は、じつは説得されたいと思っている。最初の着眼点から提案パネルの中を行き来し、読み解きながら「そうか、そうか」と相槌を打ち続けたいと思っている。読みやすい文字量と大きさは、そのための最初の留意点だが、途中で審査する側から作品を見てみたらどうだろうか？ 相手の立場に立つ、そこに相槌のヒントが隠れているかも知れない。